

0:34 レイジ34ファン

2005(平成17)年9月13日鑑賞(ユウラク座)



監督・脚本＝クリストファー・スミス／出演＝フランカ・ポテンテ／ヴァス・ブラックウッド／ケン・キャンベル／ジェレミー・シェフィールド／ショーン・ハリス／ポール・ラットレイ／ケリー・スコット（ギャガ・コミュニケーションズ配給／2005年イギリス映画／85分）

……舞台は1863年に開通した世界一古いロンドンの地下鉄構内。恐怖のターゲットは0:34の最終電車に乗り遅れた1人のヒロイン！なぜ彼女の周りの男たちが次々と殺され、彼女は恐怖にさらされるのか？また、地下鉄構内の主ともいふべき「化け物」はなぜ存在し、彼（？）は何をを目指すのか？そしてまたこれはホントの世界なのか、それとも幻なのか……？ラストにおけるちょっとした「オチ」に注目だが、薄目半分でしか観られない私には、所詮ホラー映画は不向き。やっぱり感動モノの方が……？

 原題は『CREEP』、邦題は『0:34』

この映画の邦題『0:34 レイジ34ファン』は地下鉄の最終時刻を示すもので、この映画のポイントをうまくついている。他方、原題の『CREEP』とは「ぞっとする感じ」を意味する名詞で、これもこの映画の本質をズバリとついたもの。さてこの映画が見せるホントの「Creep」とは……？

 地下鉄を舞台としたホラー映画の発想は……？

地下鉄を舞台とした大活劇が韓国映画の『TUBE』（03年）（『シネマルーム6』225頁）なら、地下鉄を舞台とした本格的ホラー映画がコレ。最終電車が出発した後、地下鉄の出入口が閉鎖されることは日本でも目にする光景だが、1863年に開通した世界一古いロンドンの地下鉄のチャリング・クロス駅では、最終電車が出発してしまうと、その駅から構外へは翌日の始発まで絶対に出ることができな

い。しかもそんな深夜の地下鉄構内には、たくさんのホームレスが生活しているうえ、無人の地下鉄が走り回り、貯蔵室、下水道処理場などの他「手術室」まで……？ これってホント……？ ホントなわけないよナ……。

ヒロインも大変……？

この映画でヒロインとなるケイトに扮するフランカ・ポテンテはドイツ人で、『ボーン・アイデンティティー』（02年）や『ボーン・スプレマシー』（04年）でハリウッド進出を果たした女優とのこと。この映画の舞台をアメリカの地下鉄ではなく、何層にも重なったミステリアスな伝統あるイギリスのロンドンの地下鉄にすることにこだわり、結果的にチャリング・クロス駅と設定したのは、いわば当然。

しかし、なぜヒロインにイギリス人ではなくドイツ人を起用したのか？ それはパンフレットで監督・脚本のクリストファー・スミスが言うように、「ロンドンの地下鉄を舞台にしながらも普遍的な恐怖を追求するために、主演には作品からイギリス的な雰囲気を除いてくれる人、すなわち外国の女優を望んだ」ためだが、その意図は私にはもうひとつよくわからないもの……？

彼女の演技力やその頑張りぶりにケチをつける気は毛頭ないが、もうちょっと本場イギリス風の美人を起用してほしかったというのが、私の正直な気持……？ しかし素足で走り回ったり、下水槽の中につけられたり、化け物から本気で(?) 殴られたり、このヒロインも大変……？

一夜で一変！ 人間の価値とは……？

ヒロインのケイトはファッション業界で活躍するセレブの1人という設定。したがって、「男なんてチョロイもの」と思っているから、ヘンに色目を使って近寄ろうとするガイ（ジェレミー・シェフィールド）をケイトは当然無視……。ところが、なぜか地下鉄の列車の中には、「葉っぱ」でかなりラリったガイが突然登場するうえ、ズボンのジッパーに手を……？

地下鉄の構内で次々と起こる恐怖の中で混乱し、次第に取り乱していくケイトが、1匹の犬に導かれて入ったところには何と若いホームレスが1組。それが、

ジミー（ポール・ラットレイ）とマンディ（ケリー・スコット）だが、このマンディは何とケイトが地下鉄の1日切符を譲ってもらった女性。そして、0:34の最終電車に乗り遅れたケイトは、一夜の恐怖のどん底を経験した末、やっと翌朝1番の地下鉄に乗る乗客と出会えることになったが、その時のヒロインの立場は……？

この世における人間の価値なんて儂いもの。ましてや、社会的立場などは一夜にして変わってしまうもの……。それは、去る9月11日に実施された衆議院議員総選挙の結果を見ても明らかで、結果が判明した2日後には議員宿舎明渡しのナマナマしい映像が……。猿は木から落ちてでも猿だが、国会議員は選挙で落ちればタダの人……。もっとも、小選挙区制度はオセロゲームのように大きく白黒が入れ替わる可能性があるから、今回落選した議員もそれほど悲観しなくていいのかも……？

オペラ座の地下とは大違い！

ミュージカル『オペラ座の怪人』や映画『オペラ座の怪人』（04年）では、主人公ファントムが住むオペラ座の地下にある美しい湖が印象的……。その湖上をボートをこいでゆっくり進んでいくという美しいイメージは、今や全世界の人々の目に焼きついている……。それに対してこのロンドンの地下鉄構内の汚さは……？

ベンチに座って電車を待っているケイトが線路上を動き回る1匹のネズミを目にした時点から少しいやな気がしたが、映画の中盤では大量のネズミたちが……。さらに地下を流れている下水道処理の仕事に従事するジョージ（ヴァス・ブラックウッド）やアーサー（ケン・キャンベル）たちは、あまりメジャーな立場でないのは仕方ないかもしれないが、この映画ではそれが徹底したものに……？

西欧諸国はインフラ整備の先進国だが……？

社会基盤（インフラ）が整備された西欧諸国では、コレラやペストなどの「伝染病対策」もあって、何より第1に下水道が整備されたはず。それは、あの有名なミュージカル『レ・ミゼラブル』で、主人公のジャン・バルジャンが傷ついたマリウスを肩に巨大な下水道トンネルの中をジャベール警部の追及から逃げていくという物語でも有名。ところがこの映画を観ていると、ひょっとしてイギリス

はフランスよりも下水道の整備が大幅に遅れているのでは、と思わず考えさせられてしまったが……？

まともに観たくない「化け物」……？

この映画の前半の「主人公」は次々と恐怖にさらされるヒロインのケイトだが、中盤以降の「主人公」は、それまで姿を見せないまま隔離された地下鉄構内でワルさの限りを尽くしてきたある「化け物」……？ さてその姿は、そしてその実態は……？ ホラー映画では「それを言っちゃおしまいヨ」となってしまうから、それはヒ・ミ・ツ……。しかし怖がり屋の私にはあまり観たくない姿であることは明らか。したがって、この「主人公」が登場している間、私はずっと薄目のままで……？ この映画を観ようとする人は、「何が出てきても俺は怖くないぞ！」という覚悟だけは固めておくように……。もっとも、この化け物の登場やその「活躍」ぶりをクスクス笑いながら、また批評しながら平気で観ていたアベックがいたのも事実だが……？

なぜ私がこの映画に行ったのか……？

私は、予告編を観た時からこの映画はまったく行く気がなかったもの。そもそもホラー映画嫌いで、「怖がり」を自認している私がなぜこの映画に行ったのか？ それは、『キネマ旬報』9月下旬号にあった、石井美由季氏の劇場公開映画批評（98頁）を読んだため……。

大阪で唯一この映画を上映しているのは、天六にあるユウラク座という場末の映画館1館のみだから、世間では全然注目されていない映画だと思っていたのに、こんな雑誌に評論が掲載……？ そしてそれは、皮肉いっぱいに書かれているものの、「なによりもまず、アイデアがいい」「次々と頼みの綱を失ってパニックに陥る彼女の姿は、戦うヒロインものを見慣れているこの御時世ではかえって新鮮だ」、そして「なんとも言えない後味の悪さ（褒め言葉）が残る」などと称賛の言葉がいっぱい……？ それにつられて、つい行ってみた私だったが……？

2005(平成17)年9月14日記